2007. 1. 30 朝日新聞より

まちかど

▽車いすバスケの安選手が中学生に実技披露

04年のアテネパラリンピックに車いすバスケットボールの選手として出場した、ひたちなか市出身の安直樹さん(29)が29日、那珂市立瓜連中学校の2年生約90人に実技を披露した。安さんがゴール下に走り込み、片輪でシュートを決めると生徒たちから大きな歓声が上がった。生徒も安さんの車いすでシュートに挑戦した＝写真。

安さんは中学2年のときに股関節の病気で歩けなくなった。「本気で好きになるものに出会い、絶対あきらめなかった」という話に生徒は聴き入っていた。

2006. 12. 3 朝日新聞より

学習帳販売益で講師派遣手助け

つくば・不登校の子支援NPO

つくば市で不登校の子どもの支援などをするNPO法人が、出版したテキストの販売益で、県内の社会人講師が小中学校で授業をする「ゲストティーチャー」のコーディネート事業に取り組んでいる。テキストは、ひらがなやアルファベットでつまずいている子どものために実践をもとに作り、今秋、絵本版も刊行。モノと人の両面で「教材の地産地消」を目指している。（斉藤智子）

（上）「風のような音を出してみよう」。「夢体験」の講師の指示に思い思いに奏でた＝龍ケ崎市長山の長山中学校で（下）2種類の「れんしゅうちょう」と、新しく出版された「ひらがなえほん」

教材と先生 地元で確保

11月下旬、龍ケ崎市立長山中学校で「夢体験」として12の体験活動が行われた。このうち、「お琴にふれてみよう」「結城紬機織り体験」「水戸芸術館タワーの形の貯金箱作り」の三つの活動を、元教師らがつくるNPO「リヴォルヴ学校教育研究所」がコーディネートした。

同NPOは、03、04年度に文部科学省の委嘱を受け、県内で社会人講師延べ223人の学校訪問をコーディネートした。

一方で、不登校の子どもを学習支援する教室を運営。ひらがなの「し」を左右逆に書いたり、「い」と「こ」を区別できなかったりする子どものために、絵やリズムに乗った節回しで文字の形をとらえられるテキスト「ひらがなれんしゅうちょう」を作った。昨年3月の刊行以来、売り上げは1万部を超え、今年10月から「ひらがなれんしゅうちょう」の絵本版「ひらがなえほん」（全5巻）も刊行している。

今年3月には、「ABC英語れんしゅうちょう」を刊行。「F」は旗の形、「b」は「2階からたてぼう、クルッ」など、目と耳からの情報を生かしてアルファベットを覚えてもらう。

11月からは独自事業として、2種類の「れんしゅうちょう」の販売益をもとに、「ゲストティーチャー」の訪問支援を始めた。学校も講師も県内が対象で、長山中学校を皮切りに、今年度はこれまでに7校をコーディネート。講師を招くのにかかる費用の最大8割を負担し、クイズ・写真を使った資料の作製や講師の立ち位置、担任教諭がどうかかわるかなど、授業計画の立案も手助けする。

小野村哲理事長は「ゆとり教育の問題が言われるが、体験学習のやり方やコーディネーター不足が問題。モデル授業となれるようにしたい」と話す。

2006. 12. 20 茨城朝日より

機織り体験の様子。地機（じばた）と呼ばれる機織り機に興味津々の児童ら

常陸大宮市

山方南小で結城紬の機織り体験

常陸大宮市野上の市立山方南小学校で8日、同小4年生を対象に結城紬の機織り体験（いばらきマナビィ・ネット主催）が行われた。

指導したのは、県工業技術センター繊維工業指導所の望月政夫所長(57)ら職員5人。児童26人は、結城紬の歴史を聞いた後、専用の道具「つくし」「おばけ」を使っての糸取りと「かせあげ器」で糸上げを体験し、地機（じばた）と呼ばれる機で織り方を学んだ。

真綿から糸を引き出し、手でよる「糸取り」に苦戦していた高野倉拓也君は「丁度良い太さにするのが難しかった。織物が出来るまでにすごく時間が掛かるんだなと思いました」と感想を話した。

最後に児童を代表して木村恵さんがピンク色の結城紬のおしゃれ着を着て、着物姿を披露した。木村さんは「お祭りの時に着る浴衣よりもちょっと重い。着られてうれしい」と笑顔で話した。

糸とり体験の様子。加減が分からず、糸が切れてしまった児童も

2007. 1. 30 朝日新聞より

教室に行こう！

山方南小・「結城紬」を制作

体験通じて郷土を学ぶ

「がん、がん、がたん」。織り機の音とともに児童たちの笑い声が響く。常陸大宮市立山方南小学校（桜岡三喜男校長）で行われた「結城紬」の制作体験に4年生26人が参加した。

制作体験は社会科の「郷土に伝わる願い」という授業の一環。同小学校は03年に旧山方町の野上小、小貫小、長田小が再編されて誕生したが、郷土の様々な文化を体験学習する授業は、旧野上小で10年以上続けていたものだ。

児童たちはこれまでも地元の和紙やお手玉作り、陶芸など教科書だけでは学べない「生きた授業」を受けてきた。4年生担任の小林恵子教諭は「教科書で学んだことを直接体験させることで、子どもたちの好奇心を刺激できる。知恵袋である地元のお年寄りに講師をお願いすることで地域との交流も広がります」と話す。

今回は着物のよさを知るのが目的で、県工業技術センター繊維工業指導所（結城市）の職員5人が講師を務めた。児童が体験したのは、40以上ある工程のうちの三つ。真綿から糸を引き出す「糸とり」、それを機械を使って巻き上げる「糸あげ」、そして「機織り」だ。

機織りを初めて体験した海老根有沙さん(10)は「足を動かせば手が止まってしまうし、腰に気をとられると足のひもがはずれてしまう」と、その難しさに真剣な表情。授業の中で、鮮やかな白の着物に袖を通してみた木村恵さん(10)は「肌触りがつるつるしていて温かい」と声を弾ませていた。指導にあたった同指導所の望月政夫さん(57)は「織物も機械化が進んでおり、子どもたちに手作りの苦労とそのぬくもりが伝われば」と語る。

最後には、息を切らせながら機を織ったり糸を巻いたりする児童の姿もあった。小林教諭は「体を通して学んだことは決して忘れない。郷土にある伝統工芸のすばらしさを少しでも分かってもらえたら」と話す。

講師の指導を受けながら結城紬の制作を体験する児童たち＝常陸大宮市の山方南小学校で